

国際理解と平和の教育について（第5報）

中三選択科目を中心にした取り組み

丸 山 豊 大 口 悦 子
加 藤 容 子 持 山 育 央

【抄録】 学校改革目標「国際理解と平和の教育」から中3学年テーマを「生命の尊厳」として、各担任（4名）の教科の専門性をいかしつつ、選択教科の展開を試みた。各教科の学習内容が、修学旅行の体験学習へむけて総合化されていくことがどこまで可能かという実践報告としたい。

【キーワード】 生命の尊厳 アジアと日本 健康と安全 文学と生命の尊厳 科学技術と平和

1. はじめに

(1) 中三選択科目の位置付け

「学習指導要領に定められた選択科目をどう展開するか」が問題になったときつぎのような教官全体の合意がなされた。

- 中3で週1時間の選択科目を置く。
- 学年担任団（4名）の同時展開授業としてティームティーチング、及び小人数授業の在り方を考える。
- 共通テーマを設定し各教科の専門性を活かしながら総合学習的な展開を試みる。
- 11月実施の広島・大久野島修学旅行の事前・事後学習としての位置付けとする。
- 高校に向けての自己をみつめるためのまとめの学習とする。

(2) 学年会での話し合い

本校の中3は2クラス。担任団はA組（大口＝数学）、B組（持山＝国語）副担任として加藤（養護教諭、保健）丸山（社会）の4名でスタートした。

学年会での話し合いの重点目標は広島・大久野島修学旅行を中心に、学習、生活指導を組み立てることであり、その点では道徳、学活にこの「選択科目」を含めた集団指導であった。選択科目は木曜第3限に組み入れられ、その基本方針を第1回学年会議で確認した。

保護者の理解を得るため、学年だよりでその目的を知らせた。

新設選択科目の内容、ほぼ決まる
……「生命の尊厳」を中心にした
「国際理解と平和」教育……

新学習指導要領の施行にともない、中3新カリ

キュラムに選択科目が週1時間設定されました。担任団の教科をいかしながら、義務教育の総まとめとして総合学習的な取り組みを考えました。国際理解と平和の教育を軸に「生命の尊厳」を本年度のテーマとして取り上げていくつもりです。

一学期は、文学、科学、歴史、環境、健康の面から「生命の尊厳」を学びます。過去を事実として日本の加害責任にふれたり、貧困、飢餓の問題、そして健康で安全な生活を脅かしているものは何かを考えます。文学作品の中にみられる平和と生命の問題、また、人類の幸福と科学技術の発達の問題などから国際理解とは、真の平和とは何かを探っていきたいと考えています。

二学期は修学（研究）旅行へ向けての事前研究を中心に勉強します。ヒロシマと大久野島を通して一学期の学習が発展できたらと思います。

三学期は、旅行の事後学習と、「自分史」を書くことにより生命の誕生、家族、成長を社会との関わりの中で考えながら将来の進路を切り拓く何かをつかんでくれることを願っています。

あれもこれもと欲張り過ぎのようにも思いますが、保護者の皆様の御理解と御協力をお願いします。

2. 授業計画をどうたてたか

(1) 「生命の尊厳」をテーマに

「国際理解と平和の教育」は本校の教育目標の一つになっている。新教育課程を考えるにあたり、特設科目「平和科」あるいは「国際理解科」といった新科目の設立が手続き上困難である以上、その方向を活かした選択科目で試みようという主旨でスタートした。国際理解と平和教育をキーワードとして到達したテーマ

が「生命の尊厳」である。

“いのち”そして“生きること”中3の子どもたちに対し歴史的課題からのみ迫るよりこれからの生き方を含め考えていこうということで一致した。しかし、歴史的事実に目を背けては2学期の広島・大久野島の旅行は成立し得ない。歴史的側面、特に「アジアと日本」の関係については丸山が担当することとした。国語、数学、保健の各教科の性格を生かした構成を考えるために4つの共通目標を挙げてみた。

(3) 一学期の授業計画

	日程	A組テーマ	B組テーマ
1	4/15	合同ガイダンス	
2	4/22	合同授業（アジアの中の日本 1）丸山	
3	5/6	アジアの中の日本(2)丸山	文学作品からみた平和と生命(1)持山
4	5/13	アジアの中の日本(3)丸山	文学作品からみた平和と生命(2)持山
5	5/20	文学作品からみた平和と生命(1)持山	アジアの中の日本(2)丸山
6	6/3	文学作品からみた平和と生命(2)持山	アジアの中の日本(3)丸山
7	6/10	健康と環境(1)加藤	科学技術と戦争(1)大口
8	6/17	健康と環境(2)加藤	科学技術と戦争（武器の発達）(2)大口
9	6/24	科学技術と戦争（武器の発達）(1)大口	健康と環境(1)加藤
10	7/1	科学技術と戦争(2)大口	健康と環境(2)加藤
11	7/8	留学生を開んで（合同）	
12	7/15	学習のまとめのレポート	

レポートの提出 資料作成

3. 総合学習としての試み（授業実践から）

(1) アジアと日本の歴史的関係から平和、生命の尊厳について学ぶ（担当、丸山）

①第1時 「平和とは何か」考えよう。

○平和とは、戦争のない状態を指すのだろうか。

○では、日本は平和なのか。

・世界に眼を向けるとどうだろう。戦乱が各地でおこっている。

○江戸時代の日本は平和だったのか。

・江戸時代は、飢饉が何度かあった。

○平和な状態とは、飢えや貧困もないことだ。

・殺されたり、治安が悪いのも平和ではない。

○つまり、「暴力のない社会」が真の平和だ。

○暴力とはなんだろう。こどもが自殺したり、いじめにあう、これも暴力、つまり生きる権利が奪われることだ。

○では、人間を直接対象にしない暴力とは何か。自然破壊、環境破壊も、間接的に人間、生命を傷つけている行為、だから暴力だ。

○これらを含めて「構造的暴力」と定義し、これをな

(2) 共通目標について

①過去の事実としての日本の歴史的加害責任を学び国際理解を深める。

②平和とは、安心して健康で生活する権利である。

③平和、生命の尊さ、生きる喜びを文学の面から考える。

④科学技術の発達は本当の平和を生み出してきたかについて考える。

くすことが「平和＝生命の尊厳」である。

○構造的暴力には、どんなものがあるか。

・アパルトヘイト、アメリカの銃問題
カンボジア、子ども栄養失調、公害
地球の環境破壊（温暖化、オゾン）

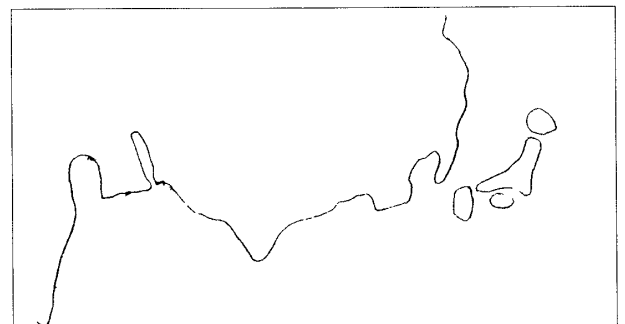
○でも全ての生命を奪う恐れのあるものはなんだろう

・原爆

○そう「核」の問題だ。核を無くすこと、「核廃絶」が平和の最大課題といえる。これらは、11月の「広島・大久野島修学旅行」で勉強していきたい。

②第2時 「アジアの中の日本」の生徒の意識調査

1) アジアの略図をどう描いているか



資料4は、代表的な生徒のアジア認識が略図に示され

ている。つまり、日本、朝鮮、中国（台湾）、インドはほぼ正確に描けている。しかし、インドシナ半島、マレー、フィリッピン、インドネシアの半島、の諸島は、大半が描かれていない。つまり、地理や歴史で学

2) アジアのイメージ調査（インド、東南アジア、東アジアについての自由記述から）

アジアの中の日本（調査） 1993.4.21

「アジアのなかの日本」を学ぶにあたって、きみたちがどれだけアジアについて関心があるかを調べ今後の学習に役立てたいと思います。成績には関係ありませんが、正確にまじめに答えること。（ここでのアジアとはインドより西側、つまり南アジア、東南アジア、東アジアの地域を中心としています。）

名 姓 中 3 年 組 番 氏 名 _____

1. 別紙にアジアの地図を書きなさい。

2. 次の地域、国々についてのイメージや知っていることをできるだけ書いてください。（まちがっていてもよろしい）

イ ン ド	
東南アジア	
東 ア ジ ア	

3. アジアの人々は、日本のことをどう見ていると思いますか。考えて自由に書きなさい。

4. アジアで行ってみたい国、あまり行きたくない国をあげその理由も書いてください。

行ってみた国	理 由
行きたくない国	理 由

5. アジアの国々には19世紀以降、列強の植民地になっていきました。次の地域国々にはどの国に支配されたと思いますか。（ ）の中に思いつく国を入れなさい。空白のないように答えること。

11) インド () 12) 韓国・朝鮮 () 13) 香港 ()
14) ベトナム () 15) カンボジア () 16) 台湾 ()
17) フィリッピン () 18) マレー、シンガポール ()
19) インドネシア () 20) ビルマ () 21) 満州 ()

6. 太平洋戦争（正確にはアジア・太平洋戦争もしくは15年戦争）中、日本軍が出兵した（侵略した）地域、国を上記から適ひその番号を○で囲みなさい。

7. 太平洋戦争（正確にはアジア・太平洋戦争もしくは15年戦争）でもっとも死の数が多かったと思う国をあげなさい。

8. 太平洋戦争（正確にはアジア・太平洋戦争もしくは15年戦争）中の日本軍の行為について知っていることを書きなさい。

9. 歴史の教科書の記述をめぐって、裁判が行われていることを（○で囲む）

知っている

その争点を知らなければならぬ書きなさい。

知らない

10. あなたは、「外国人」と聞いたとき、どの国の人を思い浮かべますか。

11. 1945年以降アジアでおこった戦争にはどんなものがありますか。

12. 感想レポートには「アジアと日本の関係」について思うところを書きなさい。

インド 水が飲めない、ヒンドゥー教、こどもが多い、ヘビ、インド象、香辛料、言葉が多い、熱風、カレー、カースト、仏教誕生、牛、ターバン、ヨガ、イスラム、デカン高原、差別、貧しい、ガンジー、植民地、砂漠、サリー、紅茶

東南アジア 暑い、病気、危険、内戦、貧しい、住みにくい、政治不安定、戦争、熱帯雨林、植民地、栄養失調、難民、やせている、飢え、ベトナム戦争、品質が悪い製品、枯葉剤、日本の侵略、赤道、多くの島、日本への出稼ぎ、日本の会社進出、ゴム、売春密入国、黒人、PKO、カンボジア、文盲資源

東アジア 人口が多い、黄色人種、ハシ、農耕、戦争、発達した国、中華料理、太平洋戦争、物価、金がある、生活レベルが高い、漢

んでも、自らの地図にない弱さがある。

全校的に調査して、その変化を見る必要がありそう

字、日本の植民地、キムチ、ハンゲル、ラーメン、昔からの日本のつながり、チャイナ服日本人が下等に見ている、日本がむごいことをした、気孔、四季がある、都会、ウーロン茶、歴史が古い、孫文、パンダ、天安門事件、被害を与えた、日本との共通点多い、不法入国、万里の長城

アジアの人々は日本をどうみていると思うか

金持ち、詐欺師、悪人、豊か、先進国、大国、ぜいたく、頭がよい、恵まれている、もうかる、安全、自由、平和、理想的な国、うらんでいる、あこがれ、黄金の国、行ってみたい、労働時間が長い、家が狭い、日本とアメリカのような関係、文化的、教育程度が高い、自分勝手、やくざ

あまり行きたくない国として、東南アジアの諸国を

挙げている。暑い、危険、怖いといったイメージがな
らぶ、また、相変わらず「外国人」はアメリカを中心
とする白人中心であり、中学校の歴史分野での世界史
の在り方が問われている。

中国、朝鮮・韓国に対する植民地化、侵略の事実
はほぼ認識しており「近代史」の定着がうかがえよう。

東南アジアの略図がほとんど描けないことは、イメ
ージが貧困か、または、マイナスイメージの裏返しで
あろう。国際理解の教育に出発点として、東南アジア
の地形、気候を基本にしてその貧しさ、貧困、内戦等
のイメージを歴史を通して原因を追求することで偏見
をなくすることが大事である。また、現在の日本が本当
に豊かな国なのか、平和な国なのかという問題意識に
迫ることも大事な課題である。

③第3時 アジアの中の日本の授業の流れ

1. わたしたちのアジアのイメージは
ーアンケート結果よりー

- なぜ、アジアのイメージは暗く差別的なのか
- 「アジアの人々は、日本を恨んでいる」ときみたちは
思っているか、それはなぜか
- 日本を「平和」「自由」「豊か」な国と考えているの
だろうか

2. アジアの子どもたちは日本についてどのよう
に学んでいるのだろうか。教科書を読んでみよう。

- 日本の教科書と比べたら
- アジア太平洋戦争に日本が敗北するわけが読み取れ
るだろうか

3. ては、日本では、アジア太平洋戦争で、アジ
アのどこまで侵略したと思うか

- 地図で予想し線を引いてみよう。
- なぜ、東南アジアに向かったのか。
植民地解放 大東亜共栄圏 ABCD 包囲陣

4. アジア解放の名目で占領した国に対し、日本
はどのような統治をしたのだろうか。

- 子どもたちに対してはどうであったか
- 民族の誇りを奪うものとは

5. 統治下の人々は、日本に対しどんな行動をと
ったのか。

- 欧米列強と対決する正義の味方なのか
- 独立運動がなぜ、反日運動と結び付くのか。

④第4時 中国・朝鮮と日本 (略)

(2) 文学作品からみた命の尊さ (担当 持山)

24通の手紙形式で書かれている、水上勉・灰谷健次
郎共著「いのちの小さな声を聴け」(新潮社)の中の
灰谷さんの「若者の死」「あんな子生きとって」の部
分を題材に「生命の尊厳」というテーマに迫るべく授
業を行った。

【題材について】

<「若者の死」>……灰谷さんの甥の少年が、オー
トハイ事故で亡くなったを通して、生命の尊厳の問題
について考える。「どうして子ともや若者たちは、ま
るで死にいきように早々に逝ってしまうのでしょうか。
(中略)死者に与えた無残さは、生者の骨を噛む
ような自責の念によって、いくらかでもあがなわれる
ものだと考えてみても、もはや人々にはその良心と誠
意が残されているのだろうか、これは決して他者へ
の批判としていうのではなく、生命の尊厳という人間
が人間であるところのたった一つの拠りところを生活
の中に生かしていけない無能力者としての自分に発
した問でもあるのです。

また、灰谷さんたちが経営している保育園の保父と
保母が交通事故を起こしてしまった。「かけがえのな
い子どもたちの生命に添う仕事をしている者にとっ
て、生命の尊厳ということはあらゆる生活の場所で確
かめられ吟味され、それは生活感覚、生理感覚として
もじゅうぶんに生かされているものだとばかり、わた
しは思いこんでいたのです。(中略) 生命への畏敬
は、言語でもって教えられたり伝えたりするものでは
ありません。わたしの生活が足りなかったのだと思
うしかありません。わたしが若者と共に生きていなか
ったのと悟よりしかたありません。

<「あんな子生きとって」>……灰谷さんが開いて
いた絵画塾に通っていた、体にハンデを背負っている
少女にまつわる話。灰谷さんは彼女を背負って、港や
動物園や温水プールへ行きました。ある時、彼女と一
緒に本屋で絵本を選んでいたとき、「あんな子生きと
ってなんの楽しみがあるんやろ」という言葉が灰谷さ
んの耳に入ります。「彼女はそのことばをきいたのか、
きかなかったのか。彼女の胸の内を思って、わたしは

体が震えました。わたしがようやく、そのことばに立ち向かえるようになるのはそれから七年後です。」

灰谷健次郎さんの文章は、「命の尊さ」に迫ったものが多い。常に「命の尊さ」を大切にしている灰谷さんの姿勢から、生徒に何かを感じ取ってもらいたいという気持ちから、この作品を題材とした。この文章で紹介されている3つの事例を通して、特に考えてもらいたかったのは下線部なのだが、特にひとつ目の下線部は少し難しかったと反省している。

授業は、本文を読んで、意見を出し合うといった形式で行われた。50分では文章量が多すぎて、十分に意見を聞く時間がとれなかった。しかし、「あんな生ききとって……」の言葉には怒りを感じるものが多く、生徒は文章を通して何かを得てくれたと思う。

(3) 環境と健康 (担当、加藤)

①ねらい

平和とは、ひとりひとりが生命を大切に、皆がともに安心して健康に生活することであるという視点に立ち、保健の立場から授業を試みることにした。そして、健康が成立する条件の1つでもある環境に焦点をあて、毎日の生活の中の何気ないことが環境にも影響していて、延いては自他の健康や生命を脅かすことにつながるかに気づかせ、安全で健康に生活しようとする態度を養うことをねらいとした。

また、二学期の広島・大久野島への修学旅行で学ぼうとする原爆・毒ガスの被害のような特別な場合でなくとも、健康を損う恐れのある化学物質が身近な生活の中にあることに気づかせたいと考えた。

②第1時「川の水があぶなくなる」

○おいしい水はどれ

- 学校の水道水、市販の飲料水、名古屋市外の水道水の3種類の水を用意し、おいしい順に順位をつけさせ導入とした。

○川の汚れは何で表すか

- BOD (生物学的酸素消費量)
- 水道水に使える川の水 BOD 3 mg/ℓ 以下
- 川の汚れと生物

○川の汚れは誰のせい

- 工場排水、家庭排水などが川の汚れのもとである。家庭からの排水の内訳、家庭から出される汚れの量を知る。

○排水はどのようにきれいにするか

- 下水道、各種浄化槽の普及状況を知る。
- 生活雑排水は3分の2くらいの人がタレ流している。

- 下水道や合併浄化槽の増加が望まれる。

○水道水は大丈夫か

- 水道水のつくり方、安全な飲み水のつくり方
- トリハロメタンについて

○川をきれいにするには、排水の汚れを減らすことが大切である。

- 排水の汚れを減らす方法を考える。

○次回までに家で使用している洗剤と殺虫剤の品名、成分、用途等を調べてくる。

③第2時「くらしの中の化学薬品」

○洗剤の種類

- 調べてきた洗剤の品名・成分・用途を発表する。
- 石けんと合成洗剤の特徴を明らかにする。
- どの用途の商品も同じような洗剤成分を使っている。汚れが少ないうちに掃除する習慣をもてば身体や環境に害の大きい強力な洗剤を使う必要はない。合成洗剤の有害性。

○洗剤による事故

- 塩素系カビ取り剤と酸性洗剤の併用による中毒事故。
- 塩素ガスはどんな気体か。人体への影響。毒ガス兵器として。消毒用 (水道水) として。

○家庭の中にも農薬が殺虫剤一

- 調べてきた殺虫剤の品名・成分・用途を発表する。殺虫剤には、農薬と同様の毒性の強い成分が含まれている。蚊取りマット。掃除機ゴミパック。

④生徒の感想文から

- こういう授業があると川を汚しちゃいけないんだなあと思い知らされる。でも、ぼく一人でどうなることじゃないように思える。もっと市や大きな団体で進めていかなければならない。
- 自分たちが使っている水の元となる川だけでなく、全ての川が汚れているということをよく耳にするので、いくら処理するといってもほんの少しだけ心配になってきました。しかし、この川を汚しているのは自分たち人間なのだから、これからは水のムダ使いや洗剤の量などもよく考えて、できるだけ川を汚さぬよう心がけたいと思いました。
- 毎日何も考えずに飲んでいて水や使い終わった後の水 (下水) がどんなふうか知ることができた。川の汚れを表す BOD や浄水場での水のろ過の仕方など知っていることもあったけれど、ずいぶん人体にかかわることもあるのだと思った。やはり未来の子孫のためにも今からでも水や大気を汚さないようにしなければいけないと思う。
- ぼくは、洗剤にはほとんど全部に界面活性剤が入

っていることを知った。ほくの家の洗たく用・台所用洗剤にも入っている。また、洗剤は混ぜるだけで毒ガスが出るなんて全く知りませんでした。たかが洗剤と思っていたものがこんなに恐ろしい物なんて、これからは気をつけなければならないと思った。

・家にあんなに化学薬品があると便利だけとなんか損をしているような気にもなった。だって有害な物質も入っているんだから体がどうかなってしまったらと思うとそっとする。作っている会社ももっとそういうことも考えてほしい。消費者も有害な物質の人っているのは選ばないようにすべきだと思った。

・私の家では、たくさんの洗剤を使っていました。今まで洗剤は汚れがよく落ちれば落ちるほどよい物だと思ってきた。けれど、よく落ちる洗剤ほど自然に悪いとわかった。

・蚊取りマツトのあの強裂なにおい。思えば虫が死ぬのなら人間にもあまりよい影響はないと思う。だから、これからは殺虫剤などを使った場合、換気など心がけたい。そしてあまり使わないようにしたい。

⑤終わりに

今回、中3の選択科目の授業を2回行ってみて、授業の内容からみると全体のテーマから少しずれてはいないだろうかという疑問が残った。生徒の反応の中にも“戦争”を扱っていないという点で他の選択の授業とは異なった印象をもった者いたようである。さらに2回の授業でそれぞれ別の内容を扱ったわけだが、せっかく2回あるのだから、題材を1つにしてそれを深めていく方が良かったのではないかと感じている。授業の内容・題材の選び方について反省が残るところである。

しかし、授業で伝えなかったことは、生徒の感想文をみてみても、生徒に伝わっているのではないかと思う。ただ、学んだことをどのように自分たちの生活の中で生かしていけるか、行動していくかという点では課題が多い。

(4) 武器の発達（担当：大口）

・授業のねらい

2学期に「広島・大久野島修学旅行」に行き、原爆や毒ガスのことについて、考えさせる。それらの武器について歴史的な流れや構造的な仕組みなど概説的に説明することをねらいとした。

特に武器がどのように発達して、その発達が人間の生活にどのように関わったか、その開発に

携わった人間が何を考え、何を感じて武器を作っていたのかも一つの視点として考えた。

・授業の流れ

第1限

武器の定義と必要性

初期の武器

火薬の発達

アルフレッド・ノーベルの悲劇

中世・近代の武器

第2次世界大戦中の武器

V2ロケット…超音速液体ロケット

開発チームの悲劇

運命にもてあそばれた人間

科学技術が権力に利用されたときの危険

宇宙開発へ

アポロ計画（サターン型ロケット）

第2次世界大戦以後の武器

ミサイル

地对空ミサイルの指令システム

大陸間弾道（ICBM）

3段式固体燃料ロケット

日本のHIIロケットでもICBMとなる性能はある。

第2限

新しいエネルギー：原子力

核分裂、核融合

核兵器の使用と威力と開発の歴史

科学者の反省

ラッセル・アインシュタイン宣言

雑誌「スカイウォッチャー」より

「原水爆を造った天文学者たち」

（以下最終部分を引用）

ベータにカモフ。現代天文学の構築に大きく貢献をしたふたりの偉大な科学者が原水爆の開発に深い係わっていたことは、我々に少なからずショックを与える。そこにどんな科学も必ず軍事化し、科学から兵器が生まれるとの主張も生まれてくる。しかし、その考えは少し乱暴だろう。科学をそうさせるのは、戦争であり冷戦である真の問題は、戦争を根絶することである。そうすれば、どんな科学も軍事化することはないだろう。科学を生かすも殺すも、結局は人間の心と社会の問題なのである。

化学兵器

毒ガス

枯葉剤

生物学応用戦

1972年に条約で禁止。しかし、研究は続けられている。

・生徒の感想文より

全体的に内容が難しかったようで、理解しなかったようだ。しかし、生徒なりに兵器の開発の流れや核兵器などの大量殺りくの兵器に対する怖さやそれを開発することの社会的責任を感じていたようだ。

以下は生徒の感想文より抜粋した。

(中3男子)

プリントをどえりゃいっぱいもらったから、なんかやだった。今日の話は、ぼくにはすごくむずかしかった。原子ばんだんを作りたいという学者は、死んでほしい。なんでかきいてみたい。あんなもんぜったいつくってほしくない。

(中3女子)

今もこの地球上には何十個、何万個という爆弾やピストル、人を殺すための武器があると思います。人を殺すのは武器ではなく人の心です。みんなが、平和な気持ちを持っていれば、武器などはただのがらくたになるのではないのでしょうか。

(中3男子)

このさき、どんどん科学は進歩していく。だから、ぼくたちは、それを悪い道へいかなないようにしなければならない。そんな国または世界にしなければならないと思う。

(中3女子)

せっかく人々が、少しでも楽になれるようにと、科学者が発明するものが、ちょっと応用で、人々の不幸にかえてしまうことを知り、とてもショックだった。

4. 留学生を囲んで (国際理解教育の試み)

「生命の尊厳」を著しく脅かされた国の人々から直接話を聞くことができないか。幸い、東南アジア、東アジアの国から多くの留学生が名古屋大学に学んでいる。中学生と留学生の交流も国際理解、平和教育につながるという観点から、夏休み前に「留学生を囲んで」を選択授業で計画した。

韓国、中国、マレーシア、インドネシアの4カ国から5名の留学生の方に来ていただけることになった。

大韓民国	ユン・ジョンヒョクさん	教育学部
中国	胡建華さん	同上
マレーシア	コ・オイディアンさん	経済学部
インドネシア	Melania Lijadさん	工学部
	Edwin S Sıdikさん	

生徒は、4カ国グループに分かれ7月8日座談会形式で交流会をもった。

(1) 韓国分科会「韋鐘赫 (ユン・ジョンヒョク) さんを囲んで」(担当 持山)

韓国から名古屋大学教育学部へ留学している韋鐘赫 (ユン・ジョンヒョク) さん (以下ユンさん) を、生徒20名が取り囲んでの和やかな親睦会だった。ユンさん自身の出身地の紹介から、韓国で使われている教科書の話、歴史上の戦争のこと、日本と韓国との関係、日本について学んだことなど、生徒からの質問を交えての自由な会話の場となった。

以下、生徒の感想文 (部分) を紹介したいと思う。

(生徒1) 今回の授業は、とても貴重なものだと思います。外国の人のお話を直接聞いたのは初めてです。私は、韓国の方のお話を聞きました。ときどき、聞き取りにくい言葉があったけれど、私が思っていたよりも日本語が上手でした。私たちの質問にも詳しく丁寧に答えてくれて、すごく良い人だなあと感じました。

(生徒2) 僕は韓国に行ったことにあります。その時、とても活気のある町だと思いました。人々も明るくて生き生きとしていました。顔は日本人に似ているけれど、どこともなく暗い日本人とはかなり違いました。ユンさんも、韓国の人々の代表のような人でした。

(生徒3) 日本と韓国とは、地図上ではとても近くにあるように見えるけれど、実際、互いのことをほとんど知りませんでした。

まず、何よりも生徒たちが強く感じたのは親近感だと思う。日頃、学校が大学の構内にあるということもあり、外国の人たちを目にする機会は多いものの、直接に触れ合う機会がなかった生徒たちには、これまで、外国の人たちをどこともなく遠い存在に思っていたに違いない。実際に、ユンさんに出て和やかに話をしていくうちに、今まで持っていた抵抗感が徐々にほぐれていった姿が、感想文から伺える。

(生徒4) ユンさんは、私たちと同じ中学生の時、日本人を悪くとらえていたようです。でも、それはしかたないと思います。日本は、韓国に、ひどいことをした訳だし、今から全力を尽くして良い印象を持たせることをしても、心のどこかに戦争のことが引っかかって、韓国の人たちは、いつまでも忘れられないと思います。でも、この出来事にこりて、もう二度と戦争が起らないでほしいと思いました。

(生徒5) 朝鮮侵略のことを質問したとき、ユンさんが「侵略ですか？日本の教科書ではそう習っているのかなあ？」と言っていた。このことから事前学習の時に習った、「侵略」と「侵攻」とのちがいが、日本人と韓国人との過去の出来事に対しての思いのちがいが分かるような気がした。今日の話は、とても良い経験になったと思う。

(生徒6) 「日本人は豊かだが精神の方がダメだ、と思っていた」と言われた時は本当に驚きました。そして、北朝鮮は「敵」として教えられたと言われた時には、やはり両国の間にできた溝は深いなあと思えました。

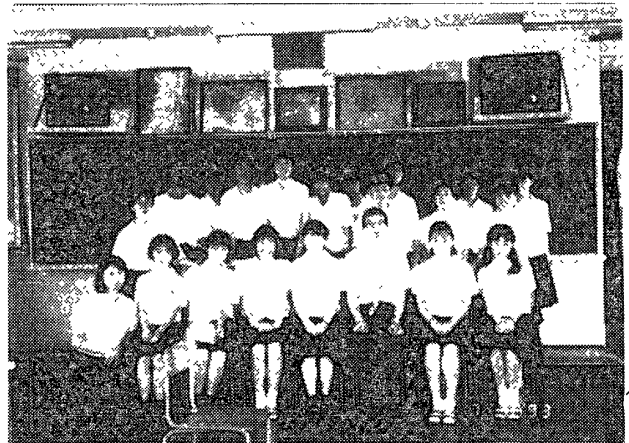
(生徒7) ユンさんが教室に入って来た時、本当に韓国人の人かなあと思うほど、日本人の顔に似ていました。ユンさんの話を聞いていると、優秀な人だと思いました。そんなユンさんが日本に興味を持ってくれたのが、うれしく思えました。なぜかという、学校の教科書では日本人の悪いことばかり教えられていたのに、今のユンさんは、そんな様子には見えなかったからです。いつまでも過去の悲惨な事を引きずらないで、新しい時代を開いてゆくことは大切だと思いました。

(生徒8) 私たち人間という生き物は、なんと悲惨な事を繰り返したのだらうと思いました。しかし、みんな本当の姿はそんなものじゃなかったということを思い出し、私たちの時代に、本当の平和が築かれると良いと思いました。

生徒は親近感を持つと同時に、お互いのことをあまりに知らなかった自分たちを自覚した。「近くて遠い国」である。中でも、「中学の時に、日本人は怖い人々だと思っていた。」という言葉は印象的だったようである。

短い時間ではあったが、日本国内からの視線だけでなく、外国(韓国)からの視線も自分のものにした生徒は、より一層、「平和」や「新しい時代の課題」についての認識を深めることができたであろう。

(2) 中国分科会「胡建華さんを囲んで」(担当 丸山)



(前列右より3人目が胡さん)

「留学生を囲んで」無事終わる 7/8

学年たより「飛翔13号」より

7月8日(木)第3限、選択科目「国際理解と平和の学習」の一学期最後のまとめとして、東、東南アジアの留学生(韓国、中国、マレーシア各1名、インドネシア2名)計5名の方に来校いただき「アジアからみた日本」をテーマに学習を深めました。5名の留学生は、いずれも名人に学ぶ将来を期待された研究者です。1ヵ国約20名に分かれ膝を交えての交流が行われ楽しく実りある時間を過ごすことができました。

それぞれの会の様子を紹介します。

中国グループ 於 社会科

講師 胡 建華さん (教育学部 比較教育研究室)

日本語読みで、コ ケンカ、中国読みで フー チュンファーさん。自己紹介で見事な漢字を黒板に書くと生徒から「さすがー、」の声。すでにひとりのお嬢さんのお父さんです。南京で大学の講師をされていただけあって生徒の質問にも一つ一つわかりやすく答えてくれました。

中国と日本の近代の歴史に横たわる大きな壁、戦争責任を問われる我々日本の国民の一人として、胡さんがどう考えているか、という関心もありました。

南京出身の胡さんの話は、まず南京事件から。日本では「南京大虐殺」中国では「南京大屠殺」というそうです。虐殺のモニュメントが市内各地に建立され、また、事実を伝えるために記念館もあるとのこと。南京の子ともたちは必ず現場で学習をするそうです。中日(日中)戦争は小学校では国語で1年生から登場していました。日の丸が中国の民衆によって遠くに追われていくさし絵をどう学ぶのでしょうか。

「南京では、この犠牲者は約30万人といわれています。日本とはその数に大きな違いがあります。これは

歴史の事実として忘れてはならないことです。」これを聞いて生徒の顔が曇る。しかし「このことで中国の人は現在の日本を怨んではいません。戦争で被害をうけたのは、両国民ですから。」との言葉に生徒たちはホッとすくすくしていたのが印象的でした。

だんだん打ち解けてきた生徒たち。いろいろ質問が出ました。中国の一人っ子政策について「双子だったらどうなるの?」という鋭い質問、もちろん誰か分かりますね。「罰金はとられないが優遇措置はなくなる。」という返事にやや複雑な面持ちでした。そのほか中華料理のこと、日本の食べ物、好きな場所など。● 胡さんは田舎の水田風景が好きとのこと、故郷を思い出されるのでしょうか。中国の子どもの英才教育、漢字の違い etc

T君の「中国の社会主義は将来どうなるのですか」の質問は、胡さんから「いい質問ですね」とおほめの言葉。胡さんが「計画経済から市場原理を導入し大きく変化している現実」を説明され「近い将来14億人になる中国の予測は難しい」との返事。とにかくそのエネルギーの大きさに圧倒されてしまいました。

50分はあっという間に過ぎ、全員で写真をとって分かれしました。

教育学部を一度訪ねてみませんか。

こんなやりとりが生徒と胡さんの間にあった。

質問 胡さんは南京大虐殺を学校でどのように習いましたか。

答え 記念館と記念碑7つあり、学校で見学に行く。30万人殺されたと中国ではいっているが、日本では違う数字を出しています。

当事の日本軍を中国の人々は「鬼子」とか「日寇」といっていました。

日本では日中戦争といいますが、中国では「抗日戦争」といいます。

質問 このような歴史を学んで日本人をきらいになりましたか。

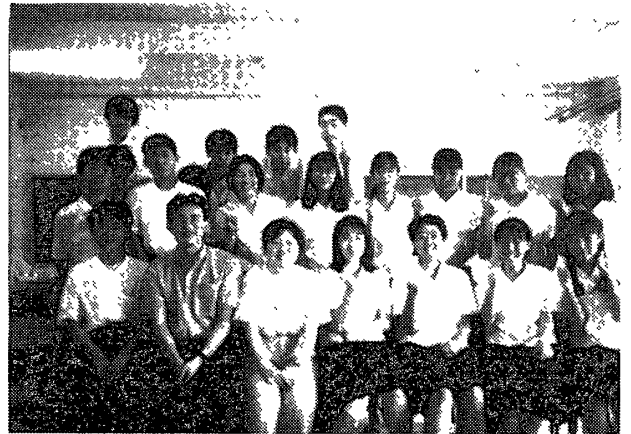
● 答え このことで中国の人は日本を怨んでいません。戦争で被害を受けたのは両国民ですから。

(3) マレーシア分科会 (担当 大口)

「コ・オイ・ディアンを開んで」

・マレーシアについて

黒板に地図を書いて場所を説明した



(前列左から2人目 コ・オイ・ディアンさん)

熱帯で四季がない

マレー人50%、中国人30%、

インド人10%、その他

宗教…仏教、イスラム教、キリスト教、
ヒンズー教など

12年の義務教育

教科は9科目

大学生は約30%

・母国の歴史のなかで日本の起こした戦争について

日本軍がマレーシアに侵略してきてイギリス人が逃げてしまい、その後独立した。

・質問 (抜粋)

Q: 日本に来たときの感想

A: 寒かったし、緊張した

Q: マレーシアの言葉

A: マレー語、中国語など

Q: マレーシアの子供の遊び

A: 昔は川で魚をとったり、たこ上げをしたが、今はTVゲームが多い

・生徒たちの感想 (抜粋)

マレーシアの文化やいろいろなことが聞けたので良かった。

これからも、こういう機会をもうけてほしいと思いました。

マレーシアについてわかったのでよかったと思います。

マレーシアのことを知るいい機会になりました。

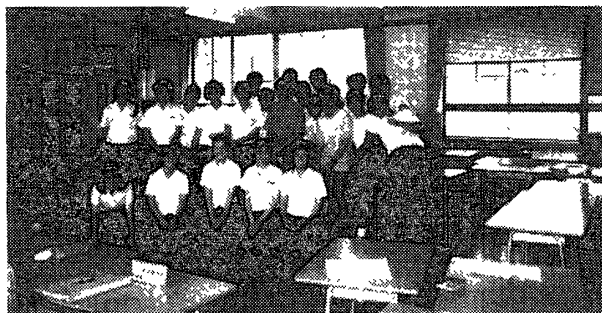
(4) インドネシア分科会 (担当 加藤)

「メラニアさんとエドウィンさんを開んで」

インドネシア分科会では講師の方を2人迎えて進められた。自己紹介の後、まず母国の地理・

民族・言語等について説明された。次に事前に準備された記録用紙に沿って「母国の歴史で日本の起こした戦争についてどう学んでいるか」「現在の日本について」「みんなの質問」の順に話をしていただいた。「母国の歴史で……」では、オランダの植民地時代から日本が占領していた3年間を含め、インドネシアの独立までの日本に対するインドネシアの人々の気持ちが語られた。「みんなの質問」では、インドネシアの料理（食べ物）、義務教育、特産物、盛んなスポーツ、日本の印象、日本とインドネシアの違い等、多岐にわたり時間が足り

ないくらいであった。資料はその時の記録である。



二列目より3人目がエドウィンさん
4人目メラニアさん

インドネシア分科会のまとめより

1993.7.8

1. 母國の歴史で日本の起こした戦争についてどう学んでいるか

侵略
 1942
 日本が北支
 南支の植民地 → 日本植民地
 敗戦後イギリス、アメリカ、ソ連、中国が
 中国を4つに分割しようとした。
 (1942. 7 中国が北支を解放した)
 支那を占領

日本が植民地時代
 ・ 資源を採るために、戦で負い果てると
 したため、支那を占領した。
 → 生き残るつもりはない。
 反共以外
 " (支那を) 植民地化した。色々した。
 (支那はいい。etc)

1945. 9. 7 敗北宣言 (植民地)
 1949. 9 国共内戦終結

1945 中国が敗れた。その理由がソ連が北支を
 占領した。国共内戦を続けた。
 結果はソ連に有利だった。
 1949 (15年戦争) 国の状態が再び内戦状態
 となった。
 1942 中国が負けた。
 日本が敗れた。理由がソ連が北支を
 占領した。

2. 現在の日本について

3. 母國の語

3. 母国の語

島の数 1367.
島の数 274.
人口 18000000人
北緯 5° ~ 南緯 11°
東経 95° ~ 141°
首都 ジャワ島のジャカルタ
人口はジャワ島に集中している。(約 10000000人)
ジャワ島以外が島は、1km²に 2人 ~ 4人 人口密度 (過疎地)
民族 250位
言語 250位

ジャワ島人口の約 75% が 爪哇語を母語とする。

4. みんなの質問

[illegible]

5. 2 学期、3 学期の实践から

(1) 文化祭（演劇コンクール）への取り組み

本校では、9月下旬に文化祭が行われる。本年度は2日間にわたって催された。中学・高校同日程で行われる文化祭だが、中学生のメインイベントは、演劇コンクールである。6月の初旬（中間テスト終了後）に演劇のクラス実行委員を決め、その実行委員を中心に、題材を選択していく。3年B組では、広島原爆をテーマにした「戦争は終わらない～原爆詩集からのコラージュ」（照屋洋 作）に決定した。この劇はクラス40名のほとんどが舞台上に上がらなければならない。従って、主役4名裏方責任者4名以外は、必ず役者と裏方の二役をこなさなければならなかった。クラスのほとんど全員がキャストであるため、台詞の意味を特に大切にしていくことにした。

【あらすじ】……広島で被爆し父と妹を失った秋子は、母と兄と共に横浜にやって来る。被爆後8年が経過した秋、運動会のリレーの選手に選ばれた秋子は、その責任を果たすべく、日夜練習に励む。それは、日々原爆症発症の不安を抱いていた秋子にとっては、自分は原爆症ではない、もう大丈夫なんだということを証明する意味もあったのだ。いよいよ運動会当日、秋子は万全の体調でリレーに臨む。バトンを受け取った秋子は、全力で走り出す。しかし、トラックを半周したところで急に目まいがして、「あの日」の様子が目の前に浮かんでくる。そして、あと少しという所で倒れ込んでしまう。そのまま入院した秋子は、しばらくしてから急な発作に襲われ、帰らぬ人となる。

6幕で構成されているこの劇は、原爆落下当時の広島市内の様子回想から始まる。中に、原爆を詠んだ詩3編を朗読する場面がある。また、第4幕では、教室の場面で生徒たちが、原爆や原爆症についての詳しい知識を出し合い、話をする場面がある。演劇を完成させると共に、広島原爆について色々な角度から学習することができたと思う。

ここに、この演劇の最初のナレーション（ナレーターの生徒作）を書き加えることにする。

「命は誕生をとげれば、死は必ずやってくるもの。そして、その命が尊いということは人間が一番痛感しているはず。11月、命が火花のように散った広島を、私たちは訪れます。戦争の傷を受けた命も、火花のように散った命も尊い。それを、私たちはここで明らかにし、広島に向かいます。」（文責 持山）

(2) 広島修学旅行の事前学習にむけて

2学期は11月11日～13日の修学旅行にむけての事前学習に入った。広島フィールドワーク、被爆者の戦後、原爆問題、大久野島の毒ガスである。

旅行直前の11月2日、本校の研究発表会があり研究授業を行うことになった。今までの学習の成果と、公民分野の発展、事前学習を兼ねて「毒ガスの島、大久野島」ととりあげた。加害と被害の問題は広島修学旅行の課題である。

(3) 広島・大久野島への旅

広島市内フィールドワーク

広島修学旅行の最も大きな行程であるフィールドワークは、1日目、広島に到着してから午後全てを使って行われた。学年79名が12のグループに分かれて、それぞれのテーマ・ねらいに従った訪問先を選択し、コースを考え、実地調査をする。

まず、はじめは、テーマ選びである。事前学習を通して、1年生から培ってきた問題意識をもとにテーマを設定する。テーマは、旅行委員会の話合いで、「戦争」にこだわらないが、「広島でないとできないこと」を条件として各班で考えることにした。テーマ・ねらいは、以下の通り（表1）に決まった。

表1 広島市内フィールドワークテーマ・ねらい一覧表

班	テーマ	ね ら い
A1	広島を歩く	昔の広島をどんな建物などで新しくしていたか。
A2	ガイドブックにない広島	広島影の一面を探り、かつ地元の人々との交流をする。
A3	広島の名所めぐり	広島城や原爆慰霊碑を見てまわる。
A4	原爆 in 広島	被爆の当時を知る。
A5	広島を港を訪れて	広島の水産業について、歴史を調べる。
A6	時間の止まった広島	原爆の傷跡が残る広島街、伝統歴史が残る下町を調べる。
B1	京橋川の周辺を訪ねて	京橋川周辺の戦争に関係する建物を主に訪ねる。
B2	ズーム in 広島	広島に今いたるまでの歴史を調べる。
B3	探検・彼らの町	色々な角度から広島を見る。
B4	これが広島の見所じゃけん	昔と今の広島の魅力を探る。
B5	被爆した寺をたずねて	被爆した寺を見てまわり当時の様子を知る。
B6	W I S H F O R P E A C E	原爆のおそろしさを知り、広島に残る傷跡を見に行く。

「広島」＝「原爆」とすんなり結び付いた班もあれば、敢えて「原爆」を避けて、広島以外の部分に目を向けていこうとする班まで様々である。

次に、自分たちのグループのテーマ・ねらいに添った訪問先を選択する。本校では、広島修学旅行を始め

て本年で3年目になる。過去2回の訪問先を資料とした（表2）。活動範囲が広島市内に限定されているため、新しい訪問先を開拓するよりは、今までの訪問先をつなぎ合わせる傾向が強かった。

表2

表2 過去の訪問先・住所・電話番号一覧

【92年度フィールドワーク訪問先一覧】		
①広島城	中区基町21-1	(082) 221-7512
②縮景園	中区上磯町2-11	(082) 221-3620
③ひろしま美術館	中区基町3-2	(082) 223-2530
④広島県立美術館	中区上磯町2-22	(082) 221-6246
⑤放射線影響研究所（比治山公園）	南区比治山公園	(082) 261-3131
⑥陸軍墓地（比治山公園）		
⑦紙屋町		
⑧あきつ神社		
⑨世界平和記念聖堂	中区基町4-29	
⑩平和科学センター（広島大学）	中区東千代田1-1-89	(082) 241-1221
⑪広島別院		
⑫中国新聞社	中区土橋町7-1	(082) 261-2123
⑬広島市郷土資料館	南区宇品御幸2-6-20	(082) 253-6771
⑭水産振興センター	西区商工センター8	(082) 277-6609
⑮宇佐動物園	安佐北区安佐町大字動物園	(082) 838-1111
⑯広島市こども文化科学館	中区基町5-83	(082) 222-5346
⑰日本銀行広島支店		
【93年度フィールドワーク訪問先一覧】（※92年度と異なる所は除く。）		
①広島市役所		
②被爆エノキ	中区基町17太田川川岸	
③厳島神社宝物館		
④宮島町伝統産業会館		
⑤幹部候補生学校	広島市安芸郡江田島町	(08234) 2-1211
⑥第一高等学校	広島市安芸郡江田島町	(08234) 2-1211
⑦白神社		
⑧広島赤十字病院・原爆病院	中区千田町1-9-6	(082) 241-3111
⑨三滝町（被爆災害者が避難してきたお寺がある。）		

このフィールドワークは広島駅解散（12：10）、宮島旅館集合（18：00）の班行動である。与えられた5時間50分の中で回ることが可能な訪問先を選択して、各班のコースとした。

フィールドワーク コース

班コース

- (A1) ひろしま美術館→映像文化ライブラリー
→広島城→寺町
- (A2) 福屋→広島テレビ→白神社
- (A3) 縮景園→広島城→頼山陽旧宅→福屋
- (A4) 放射線影響研究所→中国新聞社
- (A5) 広島市水産振興センター→広島市中央市場
- (A6) 比治山展望台→放射線影響研究所
→青空図書館→縮景園
- (B1) 比治山展望台→放射線影響研究所
→陸軍墓地→白神社→縮景園
- (B2) 世界平和記念聖堂→旧庁舎資料館
→広島市郷土資料館
- (B3) 縮景園→広島城→中国醸造
- (B4) 広島城→こども文化科学館→元宇品公園
- (B5) 広島城→超寺寺→がんじょう寺→供養塔
- (B6) 幟町中学校→原爆養護ホーム→万徳寺
→国前寺

B6班の訪れた幟町中学校に同行した。この幟町中学には、被爆したエノキがあるということで訪問した。実際に行ってみて、平和公園内にある原爆の子の像を創るもとになった佐々木禎子さんが在籍した学校だということが分かった。事前をお願いしておいたために、教頭先生をはじめとする先生がたに案内され、また、教頭室で幟町中学校放送部制作の「被爆エノキ」のビデオまで見せていただいた。おまけに、そのビデオを寄贈していたいた。事前学習では分からない思わぬ収穫があった。これが、フィールドワークの醍醐味と言える。以下、研究集録から原爆養護ホームのまとめを紹介する。

【原爆養護ホーム】原爆養護ホーム（舟入むつみ園）は、老齢被爆者による施設です。現在60歳以上の被爆者で身寄りのない人や、家で介護が受けられない人など100人以上の人が生活しています。その中の6人の方が私たちに1人ずつ付いて、部屋へ招かれ、1時間程度当時のお話を聞かせてくださいました。部屋の窓から天満川が見えて、とても眺めのよい部屋でした。お話を聞かせてくれた方々は、原爆症で指や体のあちこちが痛いのに、私達のために病室を出て違う部屋でお話を聞かせてくれました。

私達のためにベットから出てお話ししてくれた方や、ベットの上で痛い体を起こしてお話をしてくれた方に、私達は心から感謝します。私は、みなさんのお話を聞いて、そのお話が今起こったかと思ひ、何度も何度も後ろの窓から見える天満川を振り返っては、「今でなくてよかった」とほっとしてしまいました。最後に、皆さんと一緒に写真を撮り、最上階の部屋に置いてあった「むつみ園」のみなさんが作った色々なものを見せてもらいました。それを売っているとも言っていました。それを聞いて、私は、ここの方々は「今」を一生懸命生きているんだなあと思いました。一人の方が私達にこうおっしゃいました。「若いあなたたちが、21世紀へ、そして未来へ………」と。この言葉が今でも忘れられません。そして、私達はあの方が言った言葉を忘れないために、戦争のない、そしてあの変わり果てた広島を二度と見る事のない世界を築かなければならないと思いました。

生徒たちは、新たな場所、新たなコースを求めてフィールドワーク係を中心に計画した。時間的な制約を受けたことは否めないが、それぞれが充実した学習をしたというのが率直な感想である。やはり、積極的に新しいものを求めていた班ほど、得たものは多かったようだ。自分たちで見て回るだけでなく、訪問先の人たちにお話を聞く機会を持つことによって、より深い

学習をした班が多かった。

自分たちで立てたテーマで、事前研究と共に自分たち独自のコースを考え、実際に自分たちの足で検証するフィールドワークは、積極的に関わっていくほど得るものは大きく、時間が足りないという感想を持つ者が多かった。広島、被爆を体験した人々や植物・建造物などに触れることで、教室では勉強できないものを得、事前研究を通して期待していたものをはるかに越える学習ができたと思う。

このフィールドワークは、研究集録のまとめ、1・2年生への発表会（平和公園・大久野島の報告と共に）で終了した。来年度以降の更に深まった研究に期待したい。（文責 持山）

(4) 中一、中二への研究報告会の実施

修学旅行実施後、研究成果を下級生に報告する会をもった。各教室へ3班ずつ出掛け15分をめに発表した。その真剣さ、余りの緊張感にかなり生徒も疲れたようだったが、全校的なデモンストレーションにもなり、好評であった。

(5) 三学期は、自分史、卒業研究

本校は、中高一貫のため高校入試はない。したがって三学期も十分授業が可能である。旅行の研究集録を発行（193ページ、「広島、大久野島への旅―被害と加害の狭間―」した後、自分史と卒業研究に取り組んだ。原稿用紙20枚以上を目標とし、担任団4名で20名前後の生徒を担当し、製本して卒業式に渡すことができた。

この一年の取り組みを、集録の「はじめ」に載せることで、生徒と私たち4人の担任団のまとめとした。

研究集録

はじめに

丸 山 豊

1. 本校の修学旅行

本校中3修学旅行の歴史は、「東京・日光・伊豆」方面、「長野軽井沢」方面から「高山・金沢」へと、いわゆる“観光地巡り”を中心としたものだった。（むろんその中で研究活動は実施されてはきたが）ところが中高6年一貫教育推進の「学校教育」の目標として“平和と国際理解の教育”に沿った学校行事の見直しにより、今まで高校2年生で実施した広島・大久野島修学旅行を中3に位置付け、新たに高2は沖縄研究旅行とし、中高一貫の平和教育の核となった。公立中学にはない

本校の特色ある教育の1つである。

新学習指導要領の中学実施にともない、中3で選択科目が新たに誕生した。学年担任団ではこの時間を“平和と国際理解の教育”のテーマで総合学として、1学期は「生命」「平和」「環境」の学習、2学期は広島、大久野島の事前学習、旅行の係り活動と事後学習、研究集録の作成、3学期は自己を見つめる「自分史」と「卒業研究」への取り組みとした。こうして広島、大久野島修学旅行は特色ある授業を創り上げるものとなった。

2. 広島・大久野島に学ぶもの―被害と加害の狭間―

むろん、原爆の悲劇、悲惨さを知って欲しいことは当然のことだ。しかし、あの戦争（15年戦争～アジア太平洋戦争）はなぜおこったのか。これを学ばない限り旅行に出かけても単なる「かわいそう」といった同情心と「今の私達は幸せ」に留まるだけである。

中2で学んだ歴史を中3でテーマを絞って学習し直す必要がある。こうして選択科目に「アジアと日本」の学習課題が登場したわけである。近代の日本の歴史は、日本によるアジアへの侵略であり、現在も大差ない。私達の中に「脱亜論」があるかぎり……。7月に実施した名大のアジア留学生を囲んでの交流会は「アジアと日本」の現代の関係と問題を知りそれが新たな歴史への視点に発展すればと願ってのことだった。

これらのことは、この冊子には触れられていない。

文化祭演劇コンクールで“原爆の子”佐々木禎子さんをモデルにした「戦争は終わらない」（中3B）の上演は、観る人の涙をさそった。中3の諸君の熱意ある。取り組みと、悲しい結末に対する涙であろう。このような歴史的事実にもかかわらず今日まで核は消えていない。この怒りが「被害と加害の狭間」で揺れ動いてる。

語り部たちの願い、とりわけ在日韓国人として被爆した郭さんへの君たちの複雑な思いはなに。

毒ガスの島、地図からえた島……大久野島

満州事変、盧溝橋事件、日中戦争と歩調を合わせたように毒ガス生産を拡大する大久野島。その大半は中国で使用されたばかりでなく、731部隊で人体実験を支えた歴史。人道的仕事という名目で働かされた若者は、戦後、毒ガスの後遺症と不安の中で多くの犠牲となった。まさに加害と被害の狭間にある。

安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬ

ら」過ちとは私達の歴史。

3. 中3からの新たな出発として

広島、大久野島修学旅行のもう一つの目標は、研究（グループワーク）である。本冊子では、各グループの特色あふれた研究成果が報告されている。実に生き生きとした内容だ。「学ぶとは自ら行動すること」なのだ。

時間は速い。この旅行もどんどん過去へ過ぎ去り忘れられていく。しかし、強まっていくものを大事にしよう。それは、「絆」。中三の仲間、旅での出会い……

この冊子は、単なる“思い出の記”ではなく“出発の記”になることを信じている。

1994年2月1日

6. 取り組みをおえて

社会科以外の教師集団の中で、平和教育を授業として年間位置付けることは困難である。しかし、行事を核とした総合学習として選択科目を考えるなら意外に発展性がある。むろん学活、道德の焼き直しという批判もあったが、授業の同時展開と全員の持ち時間の責任は自覚を高め、新しい方向を示せたと思う。

事実上の新科目の設定であり、生徒自身が活動の場を保障（交流、旅行、集録発行、報告会）した点で、単なる講義ではない深まりもみせた。「生命の尊厳」ならもう少し違う展開もあるだろう。本年度（94年）の中3学年担は、技術、体育、英語、理科である。社会科は担任としてはいない。この選択科目について我々の実践をもとにテーマが練られている。今年度は「人」。人権・環境・自然と人のかかわりなどから始まりそうた。

研究集録目次より

名古屋大学教育学部附属中学校 広島修学旅行研究集録

広島・大久野島への旅

1993. 11. 11~13

◆◆被害と加害の狭間◆◆

目次

はじめに	2
平和宣言	4
修学旅行全日程表・係分担表	6
第1章 わたしたちが学んだこと【事前学習より】	
「広島」について	7
「核戦争後の地球」をみて	9
「人間を返せ」	12
「絆」	13
大久野島の事前授業から	16
学校祭演劇「戦争は終わらない」にとりくんで	18
第2章 わたしたちの研究【ヒロシマフィールドワーク】	
A-1 ぼくらの修学旅行	23
A-2 ガイドブックにない広島	27
A-3 フィールドワーク	33
A-4 旅の記録	39
A-5 広島のを訪れて	45
A-6 時間がとまった広島	51
B-1 Bぐみ1ばんフィールドワーク	59
B-2ズーム in 広島	65
B-3 探検彼らの町	71
B-4 これが広島の見どころじゃけん	77
B-5 被爆した寺を訪ねて	83
B-6 WISH FOR PEACE	88
第3章 被爆体験を語り継ぐ【語り部の会の記録】	
今でも尊敬している母親	95
一人の人を大事にする姿勢	97
Atomic Bomb & Mr Kawaguchi	99
今も残る原爆の傷跡	101
それはもう地獄でした	103
あの日のことは、今でもよく覚えています	105

第4章 平和公園を訪れて【広島平和記念公園】	
平和記念公園の印象	107
慰霊碑の前に立って	108
爆心地	109
韓国人原爆犠牲者慰霊碑	109
原爆の子の像	110
原爆ドーム	111
原爆資料館を見て	116
平和集会で	120
第5章 地図から消えた島（加害について）【大久野島】	
大久野島の地理	121
大久野島の歴史	122
毒ガス資料館について	123
大川さんの話を聞いて	125
大久野島の現在	127
毒ガス遺跡を回って	129
第6章 わたしたちのななか【大久野島でのつどい】	
キャンドルサービス	131
ゲーム	132
フォークダンスについて	133
肝だめし	134
大久野島自由時間（島内散策・釣り・サッカーの思い出など）	135
第7章 旅行を終えて	
思い出の短歌集	143
それぞれの思い出（思い出文集）	145
引率の先生から	18
アンケート集計結果	187
思い出を振り返って～旅行後の座談会より	191
編集後記	193